

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390800086		
法人名	有限会社 誠心会		
事業所名	グループホーム ゆとり		
所在地	山鹿市山鹿町下内田75		
自己評価作成日	平成28年9月12日	評価結果市町村受理日	平成28年11月11日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41—5
訪問調査日	平成28年10月7日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

馴染みの職員が関わりをもち、職員の変動がありません。利用者それぞれの能力を最大限に活かせるような支援となるように、チームワークを大切にしています。経験・知識は個々で違いますが、「人として」出来る当たり前のことを一番考え、笑顔引き出すケアに努めています。利用者様・ご家族・職員、すべて家族としてとらえ、理念に掲げる ゆったり ともに笑い 理想の生活 (頭文字 ゆとり)を目標に一丸となって頑張っています。四季折々の風景を感じとれるように、室内の飾りを利用者様と共に作成したり、気候の良い日は自然豊かな近隣の散歩をしたりと生活に楽しみを持てる機会作りに努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

入居者の高齢化と共に介護度が高くなってきている現状の中で、個別対応に配慮したケアが実践されている。職員は訴えが分かりにくい利用者向き合い、「分かりたい」という気持ちを持ってゆくり利用者のペースに合わせながら、一人ひとりと視線を合わせて丁寧な言葉遣いで語り掛けている。開設当初から「人権尊重」と「接遇マナー」に力を入れており、施設内外の職員研修での成果が実践の場に活かされているものと思われた。又、「運営推進会議」では駐在所・消防署・認知症サポートリーダー等多様なメンバーから貴重な意見や提案を得ており、「徘徊模擬訓練」には多数の地域住民の参加があるなど、地域と積極的に関わりながらの運営が行われている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	日々、変化される身体状況の中、理念にある「ゆったり ともに笑い 理想の生活」にむけて、利用者様と寄り添うケアに努めている。声なき声に気付けるように職員のチームとしての毎日の関わりや情報の共有を行っている。	「ゆったり・ともに笑い・理想の生活」の理念は、その頭文字が施設名「ゆとり」となっている。介護度が高い利用者が多い為、ゆっくりした対応が求められており、個々の利用者を理解した個別ケアを心掛けている。目線を合わせ、手を握り、一人ひとりと向き合う暮らしの中で、利用者が安心して職員を信頼し、笑顔で過ごせるよう努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日々の行事などを通して地域とのつながりを持ち、交流を実施している。季節の行事では、近隣小中学校への積極的なお誘いや、先方からのお誘いもあっている。	設立当初から地域への地道な働きかけにより、相互の関係が密になってきている。事業所主催の餅つき・夏祭りには、準備段階から地域住民の協力があり、参加者も年ごとに増えている。ホームからは小学校の運動会や市の文化祭に出かけ、交流が図られている。特にホーム主体の「徘徊模擬訓練」は、地元中学生の参加も得て定着してきており、ホームの努力の賜物であると思われる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年度は震災のため実施できていないが、徘徊模擬訓練を主導し実施している。また、今年初めてのRUN伴の参加で11月6日に認知症の方とのたすきをつなぐ全国的な活動参加を進めている所である。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営委員会にて毎回事業についての意見交換を行い、サービス向上に活かしている。資料についても改善案を頂き、次回の会議では内容の変化につなげている。	運営推進会議は、併設の小規模多機能ホーム「音色」と合同で、2か月に一度開催されている。行政・社協・民生委員の他に、地元消防署・駐在所・認知症サポートリーダー等が委員として参画している。他グループホームでも委員を務めている方もおり、多様な意見が出され、ホーム運営に活かされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃から市の担当者との連携を取り、協力を得ている。	日ごろから「市長寿支援課」や「地域包括支援センター」とは密に連絡を取り、協力関係を築いている。特に「徘徊模擬訓練」は行政との連携がなければ実現しない大きな行事として捉えている。又、ホームの夏祭りには、市職員が家族連れで訪れる等、友好的な関係がホームへの理解につながっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎回のカンファレンスなどにおいて身体拘束への理解を得る機会を作って、日頃のケアに活かしている。また、夜間のリスクマネジメントとして対策を考える際も、身体拘束につながらないかをしっかり社内研修しながら検討している。	「身体拘束排除宣言」が、玄関と廊下の壁に掲示してある。4点柵や立ち上がりセンサー等は使用せず、家族には転倒リスクについて、見守り強化等で対応することを伝えて記録に残している。リスク回避の為、毎月の定例会議で個々の利用者のケアについて話し合い、「身体拘束」はしないという意識統一が図られている。	家族アンケートによれば、転倒の多い家族の心配の声も聞かれており、対策等についても更なる検討が期待される。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	カンファレンスや会議での勉強会などの機会を作り周知徹底を実施している。また、言葉の使い方についても日々注意し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修などがあれば参加を促しているが、今年度は参加なし。現在該当者なく活用はしていない。ただし、必要時は活用できるように体制づくりは行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居契約に際し、時間をかけて説明を行い、疑問不安点など聞き取りを実施し、ご家族の同意のもと契約締結できている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会を毎年実施し、意見交換の場と、現状報告等の機会を作っている。また、日頃より面会の機会や定期受診の同行時に、ご家族との関わりを持ち、知り得た情報をきちんと管理者へ報告し、早期の対応を行っている。	小規模多機能ホーム「音色」と合同の家族会を年一回開催している。家族との繋がりを重視しており、病院受診は家族同行とし、情報交換をしながら本人を共に支えている。面会も多く、その場での意見や要望については、話し合いながら家族の納得のいくケアに努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の事業所会議において機会を作り実施している。また、年に2回の個別面談を行い、職員の意見に対しての対応を幹部の会議で話し合い、解決に努めている。	担当制で利用者のケアにあたっているが、月一回の定例会で個々の問題点について話し合い、情報の共有化が図られている。又、職員研修に力をいれており、「接遇」の研修受講後、利用者に対する丁寧な言葉遣いや優しい関わりができるようになった職員の姿が見られ、研修が活かされている事が伺えた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	日頃からの評価を踏まえて、給与などへの反映を行っている旨を各職員へ伝えて実施している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	人事評価制度の導入。一人一人の能力アップにむけて、事業所は研修の機会を確保し、参加を進めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	圏域での集まりに参加し、情報交換や勉強会などを実施している。ブロック研修会への参加を通じて交流の機会を持っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の意見や意向を聞く機会をすぐに作り、時間をかけて各職員間で共有し、安心できる環境を作るようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談段階で聞き取りを実施し、しっかりと家族の意見や意向を反映できるように対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当初より緊急性や優先順位についてアセスメントし、対応を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の意欲や意向、出来る事を見極め、他利用者や職員と協力して実施している。また、時間に関係なく家族の面会はいつでも快く受け入れている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	御家族本人の関係を一番に考え、それをフォローできる環境作りに取り組んでいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	行事などを通して、機会を作って実施している。	地元の利用者が多い為、併設の小規模多機能ホームの利用者・家族にも知人がいたり、地域の行事に出かけた際も、馴染みの人に出会って笑顔の会話がみられる等、積極的に地域に出る機会を作り、馴染みの人や場所との関係継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の活動を通して協力できる環境を作っている。また、個々の性格をしっかりとアセスメントし、席の配置等も考慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	日頃より、相談支援が出来る体制は整えているが、実際の機会は少ない。会社の理念として、家族と思って対応する。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎日の暮らしの中や、定期的カンファレンス前には本人の意向の聞き取りを行っている。本人の発言が難しい状況であれば、ご家族からの情報収集など、把握に努めている。	介護度の高い利用者が多く、思いや意向が把握しにくい現状であるが、「分かってほしい」という気持ちで表情・声のトーン・態度等に留意し、思いや意向を受け止める努力をしている。訪問時、「外に出られますか?」と書いたボードを示し、意思確認をしている職員の姿が見られた。又、2か月に1度出張美容師の来訪があり、髪型や染めの有無等、本人・家族の要望を取り入れた美容が行われている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居当初より、家族からの聞き取り、本人との会話の中で把握をする機会を作っている。暮らしのシートの活用		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々変化する状態を把握し、本人が出来る事を優先して実施している。また、生活歴の中から出来るかもしれない事も考え、機会を設けている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	面会時等に都度意向等を確認し、計画へ反映している。	介護計画作成には、全職員が関わりを持ち、担当職員がモニタリングをして毎月の会議で話し合っている。3か月に一度見直しをして変化があればその都度見直しており、現状に即した計画となっている。本人の言動を観察し、記録を残して、本人をよく理解する事に努めており、細かなニーズに応えられる計画作成を目指している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の支援の記録を基にモニタリングを実施し、カンファレンスにて見直しをしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	都度柔軟な対応ができる体制を作り、必要に応じて実施している。家族の支援を活かして、自宅への外泊もある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	年々、身体能力的に積極的に外へ出向くことが難しくなっている状況ではあるが、家族の協力で短時間の外出、外食など楽しむ機会は取れている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	希望や要望に応じて実施している。施設から近いかかりつけ医ということで、利用者様の負担も少なく移動ができ、かつ、体調次第では往診対応もできている。	入居前のかかりつけ医を継続しており、受診は家族付き添いとしている。重度化に伴い、家族と話し合いを重ね、段階を経て主治医から協力医への移行を促す事で、本人の健康状態の把握と終末期への支援まで考慮している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の業務において都度意見交換の場を設けている。また、夜勤と日勤に看護師がいることで、介護職員も安心して相談できる環境にある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院が決まった時点で情報提供書を送り、退院の際も情報交換、退院時のカンファレンスを実施している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナルケアの説明同意を得る機会を速やかに作り実施している。ただし、同意後の利用者様の体調変化から、終末期の期間が長引いた場合の再確認が課題である。	開設当初から、看取りを行う方針であり、入居時に説明している。終末期になった時、状態の変化によって家族の意向が違ってくる場合もあり、本人の意識がしっかりしている内に、本人の意思の確認も必要ではないかと考えている。全職員が看取りの経験があり、医師・家族・職員が一体となった看取りケアが行われている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応方法について、日頃より職員間で対応方法の周知徹底を図っている。書籍による学びや、看護師からの指導など、学びの機会は取れている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	熊本地震を体験したことで、災害マニュアルの見直しを現在おこなっている。また、被災した際はサポートリーダーの方の協力や、運営委員方々の協力を得ることができた。	今回の熊本地震は、これまでの災害対策を見直す機会となった。水の確保が最も重要と考え、タンクを購入し、風呂の水は地震発生後から常に満タンしている。又、職員が災害発生時にどう動くか等の連携体制の強化も図られている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日々のケアの中でプライバシーの確保を行い、言葉かけにも注意を払っているが、出ていない場合も見られる。職員同士の会話についても現在課題としている所	職員は、研修で「接遇マナー」を学び、排泄や入浴時の羞恥心等への配慮を心掛けている。日常ケアの一つ一つについても丁寧な言葉かけで本人の意向を確認しながらの関わりが見られた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ本人の意向を聞き取れる環境を作り、反映している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者様の笑顔を引き出す支援ができるように職員全員で努力している。意思疎通が難しくなっている方も多く、しっかりとした聴き取りは正直難しいが、個別ケアに心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	行事や誕生会などには化粧を施し支援している。また、カット・カラーなどご本人の好みに合わせて美容の予約も職員で行っている		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	行事食や、季節の食材を調理する際に、利用者と共に調理や片付けを行っている。	野菜の皮むきやカットが出来る利用者もあるが、食事に介助が必要な利用者が多く、その人にあった食事形態で提供されている。職員も一緒に同じ物を食べながら優しい声掛けで丁寧に対応し、家庭的な雰囲気である。食事拒否の人には、無理強いする事なく食べたい時に食べてもらう等、柔軟に対応している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の摂取状況を把握し支援出来ている。9人それぞれの形態をきちんと職員間で統一し、記録に残している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアを実施している。看護師より、口腔ケアについてのやり方を教えてもらい、職員全体で取り組んでいる。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日々の状況把握を行い柔軟に対応している。日中、夜間と排泄のタイミングを把握し、可能な限りのトイレでの排泄につなげている。オムツでの排泄となる場合は、適したパットの使用となるように皆で検討している。	トイレは3か所あり、車椅子で十分入れるスペースと、壁に手すり、便座に肘掛けが取り付けられ、トイレ環境は整えられている。排泄の自立と、おむつ内排泄の不快感解消の為に、トイレでの排泄を心掛けており、毎日決まった時間に誘導している。夜間もポータブルトイレは使用しておらず、職員の見回りで対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況の把握は必ず行っている。排便コントロールが必要な方がおおく、薬の相談はかかりつけ医と相談しながら、水分や食事形態の工夫で調整している。体操やレクなどを実施し体を動かす機会を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週3日の入浴は必ず行っているが、身体状況に応じて、創傷の処置が必要な場合など、回数に関係なく入浴して頂いている。	全利用者に介助が必要で、二人介助の利用者もある。シャワー浴の人や浴槽に浸かる人等、その人にあった入浴支援で快適な入浴になるよう心掛けている。又、お湯は個々に入れ替え、清潔保持にも留意している。入浴後はクリームを塗布し、利用者の心身の癒しとなるよう努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個室の準備は当たり前だが、人の声で安心される方にはホールの畳で休んでも頂いたり、くつろぎやすいソファで休んでも頂いたり臨機応変に対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	介護記録に薬情を付けており、情報の共有を行っている。定期的受診では、病院との情報交換を行い症状に応じた服薬の見直しを提案している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外気温等のこともあり、体調を考慮し実施している。夏場の外出は難しいが、春・秋については外に出て、草取りをしたり、散歩したり、その日の状況に合わせた対応を実施している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	出来るだけ希望に添えるようにしているが、毎日実施できていない。行事などを通して外出を行っている。必要時は御家族にも協力を得ている。	介護度が高い利用者が多くなっているが、可能な限り外出の機会を多くしたいと考えており、桜・菖蒲の花見や菊池ひな祭り・中学校の運動会見物等に出かけている。日常的には、個別対応で利用者の意向に沿って、施設周辺の散歩に出かける事で、気分転換が図られている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は御家族にして頂いており、実施していない。買い物については、ご家族との外出にて機会が合っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	実際には1名の利用者が電話が出来るように支援している。また、耳が聞こえない利用者様のご家族からは、FAXの手段でやりとりの支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	安心して生活できるような環境を整えている。季節ごとに壁の装飾を工夫し楽しめる空間作りを行っている。職員も楽しんで、演出している。	リビングには、ソファやテーブルが置かれており、利用者が職員と一緒に談笑しながらくつろぐ姿がみられ、穏やかな空気が流れていた。フロアから一段高くなった所にある堀コタツ設置の畳の間は陽当たりが良く、食事をしたり昼寝の場として活用されている。リビングから居室に続く廊下は照明がやや暗い印象であるが、壁には額絵や山鹿灯籠祭りの大型ポスター等が貼られており、落ち着いた雰囲気が出た。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	席の配置などの配慮、実施出来ている。利用者様の相性などしっかり考えて対応している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	御本人が使っていたものや、タンスなどを持ってきて頂き、環境作りを実施している。ご家族の写真の持参も声かけし、飾っている。	居室は、個々の利用者の住まいとして、「菊鹿町1番地から10番地」の住所表示が取り付けられている。各入り口の玄関灯は、柔らかなオレンジ色の灯りがセンサーで点滅し、夜間利用者の出入りが確認できるようになっている。居室には家族持ち込みの整理タンスやテーブル等が置かれ、壁には家族写真と代表からの手作り「敬老祝メッセージカード」が掲示されており、利用者を大切に思う気持ちを感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	誰でも行き来できる室内の空間となっている。キッチンやトイレなど、職員も利用者様も共同で使用している。		